

史遊会通信

NO. 194 年 日
平成 23 年 1 月 13 日
1 月 1 日 発行

事務局
03-3712-0651
下山田方

自由執筆

江 雪

森下 征二

千 山 鳥 飛 絶
萬 徑 人 蹤 滅
孤 舟 蓑 笠 翁
独 釣 寒 江 雪

山また山：：、一面の雪景色である。
ひっそりして鳥の飛ぶ影もない。道はすっ
かり雪で埋まり、人の足跡は消えている。
凍りつくような寒さの中で、蓑笠の翁がた
った独り、降りしきる雪の中で小舟を河に
浮かべ、じっと釣り糸を垂れている。静か
である。釣り糸の先を見つめる老人は、黙
り込んだまま全く動かない。微かに聞こえ
てくるものは、悠然と流れる寒江のせせら

ぎだけだ：：：。
中唐の文人、柳宗元が詠った唐代五絶の
傑作の一つ、「江雪」の情景は誠に冷えび
えしている。それだけではない。時間と空
間が停止し、寂寞の世界が広がっているで
はないか。

王維、孟浩然、韋応物：：。彼らと並
んで、山水詩の名手と謳われた柳宗元は、
この短い詩の中で一体何を詠おうとしたの
だろうか？ 先ずはこの詩を、目に出して
詠んでみたい。通常、この詩は次のように
読み下されている。

千山鳥飛び絶え
万径人蹤（足跡）滅す
孤舟蓑笠の翁
独り寒江の雪に釣る

多くの人々は、この詩の中に「画意」を

例会のお知らせ

◎ 1月総会

日時 平成23年1月26日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

議題 * 22年度事業報告

* 同 会計報告

* 23年度事業計画

* その他

◎ 総会終了後

講演 中込勝則氏

テーマ 杜甫の生涯

自由執筆は瀧澤中・三戸岡道夫

平山善之の諸氏

締切 1月30日

◎ 2月例会

日時 平成23年2月23日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 島津隆子氏

見る。白と黒の単彩の空間に、水墨画の構図を見るのである。それはおそらく、詩人の感情が言葉でなく、雪の厳しさで語られているからだろう。

白と黒……生き物の気配が途絶えた厳しい空間の中で、漁翁は一体何を見つめているのだろうか？ 彼の、糸を見つめる姿は厳しい。老人のまわりには、周囲を拒絶して闘う人だけが持つ、強い緊張感が漲っている。彼は一体、何を釣ろうとしているのだろうか？ その疑問を解くためには、彼の四十七年の生涯を振り返らなければならぬ。

柳宗元、字は子厚。唐の大暦八年（西暦七七三年）、長安で生まれた。名家に生まれた柳宗元は、当然のように政治家を志した。弱冠二十一歳で科挙に合格し、順調にキャリアアコースを歩み始める。

しかし、時は唐朝の屋台骨を揺るがした安史の乱の後である。様々な社会問題が一気に表面化し、政治は全く腐敗していた。民衆から怨嗟の声が高まると、若手官僚が立ち上がり、唐朝を再建するため、皇太子誦（後の皇帝順宗）を中心に、政権の獲得を目指すようになる。俊才・柳宗元が参加

したのも当然だろう。やがて、新帝・順宗の即位と共に政権を獲得した若手官僚たちは、かねての計画通り、思い切った改革を矢継ぎ早に実施する。柳宗元は僅か三十三歳で、大唐帝国の表舞台に躍り出ることが出来たのである。

ところが、頼みの新帝が風疾（中風）に罹って言語障害を起こすと、風向きは一変し、皇太子純（後の憲宗）を擁した抵抗勢力が政権を取り戻してしまった。若手官僚はこの時、致命的な失敗を犯す。彼らは皇太子を除こうとしたのである。

即位した憲宗は、確りこれを覚えていた。彼は若手官僚を遠方に流し、彼らの将来を断ち切ることにしたのである。柳宗元は特に激しく憎まれた。彼の流刑地は、都の長安から三千七百四十四里も南方に位置する永州であった。「江雪」は、この永州で読まれたとするのが通説である。

そうだとすれば、「江雪」の漁翁の姿の中に、慄然とした厳しさが窺えるのは当然だろう。有り余る才能と政治的な識見を持ちながら、都から遙かに離れた辺地に埋まり、徒に死を待つ無念さは、察するに余りあろう。

しかし、それだけではない。漁翁の姿勢の中には類まれな清澄さがある。澄み切った覚悟の程が読み取れる。孤独を良とし、不屈の闘志で戦い続ける決意の程が窺えるのだ。ならば、この詩の最後の一句は、「独り寒江の雪に釣る」と読むべきではあるまい。私はこれを、「独り寒江の雪を釣る」と読み下したい。それが文法に合う読み方ではないか。彼は雪の中で釣っているのではなく、雪を釣っているのだ。

ならば、雪とは何か？ 私はそれを、自分を抹殺した憲宗への怨念であり、天意ではないかと思うのである。

事務局だより

☆前回お知らせした総会後の講演は山本氏の都合で、中込氏に変更になりました。

☆1月は会費の納入月です。

半期分九千円をご納入ください。

自由執筆

その後の直江兼續

千坂 精一

関ヶ原役の戦後処理で上杉景勝が会津白二十万石から米澤三十万石に減封されたとき、秀吉に陪臣でありながら直臣に採り立てられた上杉家の重臣直江山城守兼續は、所領だった米澤三十万石を没収された。

ともに起つて所領を没収された兼續を気の毒に思つた景勝は、新領のうち六万石を与えようとしたが、兼續は固辞して五千石だけを頂戴した。

引責辞任した兼續は、人材育成を目指して教材蒐めにとりかかった。

その遠大な計画も上杉家の安泰があつてはじめて実現できることであつた。

兼續は、豊臣恩顧の大名の筋目を通して家康と対決した脛に疵もつ外様大名の不安定な立場を安泰にすることに苦慮したすえに、景勝から一字を賜つた景明という嫡男がありながら敢えて家康の謀臣本田佐渡守正信に取り入つて二男政重を婿養子に迎えると長女お松を娶せた。

景勝は、この政重に一字を与えて直江大和守勝吉と名告らせ一万石を与えた。

兼續は、これで上杉家は安泰と思つていたのだが、一寸先はわからぬもので、翌年正月七日に二女が病死すると、つづいてお松も八月十七日に病歿してしまつた。

本多正信との縁が切れてしまふことを心配した兼續は、実弟大國實頼の娘を養女にして勝吉の後妻にしたのだが、兼續の希いも虚しく、勝吉は二年後に暇を願ひ出て江戸へ帰ると、翌春加賀百二十万石前田利長の招聘に応じて旧名に復すと、三万石で前田家に仕えてしまつた。

外様大名から外様大名へ渡り歩く本多政重は、なにか密命をおびていたのだろうか。兼續の不幸はさらにつづいた。

まゝに述べた嫡男景明は、慶長十四年江戸に於て本多正信の媒酌で近江膳所三万石戸田左門氏鐵の娘と結婚したのだが、生来虚弱体質だったところへ大坂冬の陣での無理が祟つて病死してしまつたのだ。

わが子らに先立たれて老妻と二人だけになつてしまつた兼續は、米澤禪林寺（現法泉寺）に蔵書の禪林文庫をつくり、学問所を併設して人材の育成に心血を注いだ。

兼續が側近たちと米澤市に隣接する高畠町の亀岡文珠堂で唱和したという漢詩三十首、和歌六十七首を集録した『亀岡百首』が蔵書されている。

また、治水事業として領内を流れる松川（最上川）に直江堤といわれる堰堤が遺つているし、植林では細い枝で弾力性があつて積雪にも折れない白旗松（赤松の一種）を植えて建築資材にした。山形新幹線が米澤駅に入る手前の松林がそれである。

元和五年五月、景勝の上洛に供奉した兼續は江戸で体調を崩して静養していたが、恢復が思わしくなくそのままその年十二月十九日に身罷つた。享年六十歳であつた。

遺骨は米澤の菩提寺徳昌寺に埋葬された。未亡人お船は、のちに二代藩主になる千徳の養育係をつとめて二十万石を賜つたが、夫兼續を見送つて十八年後の寛永十四年正月四日八十一歳を迎えたところで死去した。遺骨は兼續の眠る徳昌寺に埋葬された。

その後徳昌寺は、謙信の生家府内長尾氏の菩提寺だった春日山林泉寺とのあいだで曹洞宗の祿所（寺領）争いが起こり、敗れて破却されてしまつたので、兼續夫妻の墓は林泉寺に改葬された。

自由執筆

「風物詩」に想う

(友の会) 諸橋 奏

秋・紅葉・高尾山の連想は東京人の普通の感性のようだ。越後長岡の豪雪地で育った私にはその発想は湧かない。秋の紅葉・冬の雪は遊山の対象ではなかった。在京五十有余年、初めて高尾山の紅葉狩りに出かけた。山は銀座並みの混みようであった。ところで、春は日本中がさくら前線の虜になる。この「さくら」とは……

大辞典には「サクラ：山櫻・里櫻に二大別し、古、櫻といへるは山櫻をいふ。……さくらは咲麗の約なりとも木花開耶姫のさくやの轉なりともいふ」と、又、「植物名の由来」には「咲く羣の略でラは数あることを示す接尾語」とあるが、もう一つ説得力に欠けるように思われる。

私は、サクラを、「サ」は「山のカミ」、
「クラ」は「坐す場所」の意と理解している。生活の場を山に依存していた縄文人が、冬の煙んだ山面に、パッと出現する白い花
「春山淡冶而如笑」の情景に、目に見えな

い「山のカミ」を見たことは想像に難くない。そして弥生人はこの「山のカミ」を稲田の里に招いて「里のカミ」として崇拜したのであろう。こう解してはじめて早苗饗のサ昇り、サ降りをはじめ、サ乙女、サ酒(古語キ)、サ界、サ外(里)、五月雨(サ乱れ)、サカ菜、サカ木(櫛)、サ月等の語に納得がいく。

郷里長岡の花見のメッカは昔も今も郊外の悠久山で、市民は「お山」の名で親しんでいる。太平洋戦争が始まって半年もたない、まだ銃後にのどかさが残る昭和十七年(一九四三)四月十八日(土)、我が家は親子五人とテリヤク犬のメリー、専門学校の下宿生数名とでお山に行き、満開の夜櫻を楽しんで一同帰宅した。実はこの日、日本ははじめての米軍の空襲を受けていた。

太平洋上の空母「ホーネット」を飛び立ったB25型爆撃機十六機により、東京・川崎・横浜・横須賀・名古屋・神戸が爆撃され、死者四五名、負傷者一六五名、全半焼家屋二九八戸の被害を出した。

空襲時に花見。純朴な田園地帯のこと、わが家は当然、時局を弁えない非国民と誹謗された。

敗戦も間近の昭和二十年八月一日夜の長岡大空襲は、オーブンシティにも拘らず、B29一二五機による一時間四十分余の焼夷弾の絨毯爆撃であった。市街の大部分と共にわが家も罹災焼失した。愛犬は狂乱して火の海に向って走り、消えた。あの花見を共にした学生の何人かが戦死していた。

日本の夏は何といても花火だ。毎夏八月二日、三日に催される「長岡まつり」の花火は「隅田川花火大会」と共に日本の双璧であろう。この長岡の花火のルーツは、江戸幕府がその権力衰退を天下に露呈した「三方領地替(転封)」の撤回(天保十二年七月)を祝って打ち上げた「合図」にあるようである。現在の「長岡まつり」の花火は、かの長岡大空襲で亡くなられた一四七〇余名の「鎮魂」と街の復興への「祈り」から、被災の翌年に始まった「長岡復興祭」をその起源とするもので、単なる夏の風物詩でないことも忘れてはなるまい。

櫻・花火・紅葉・雪の日本の風物詩、西行法師の「願はくは……」、梶井基次郎の「櫻の樹の下には……」の名言、やはり止めは櫻か。櫻という字はいつも気(木)掛りな存在だ。